

シロオビアゲハは1973年、東京多摩動物園の温室内で終令幼虫を見たのが初の出会いで、その温室内で成虫の姿は見えていない。1962年までの高知市でのナガサキアゲハやモンキアゲハなど大型アゲハ類の飼育経験から終令幼虫の微妙な違いを判別できる状況にあり、ミカン葉っぱ上の幼虫が幼虫図鑑でしかみたことのないシロオビアゲハだということはすぐに分かった。



シロオビアゲハが実際に飛ぶ姿は、初めて沖縄を訪れた1993年9月、どんなチョウたちに出会えるかと胸膨らませて本部半島今帰仁方面へとバスに揺られる車窓からの光景を思い出す。せつかくの初の沖縄なのに天候が芳しくなく不安な気持ちとなりつつあったとき、バス沿線に舞うシロオビアゲハの姿は「沖縄に来たんだ」という感慨と希望をわかせてくれたのだった。この日は次第に天候が回復して、一体どこからやってくるのかツマベニチョウが降って沸いたようにハイビスカスの赤い花をめがけて次々と現れる状況に歓喜した。チョウがいそうだという勘だけをたよりにまったく土地勘のない乙羽岳林道をひたすら歩いて、バス車窓にみたシロオビアゲハがシロノセンダングサの花蜜を求めて複数頭訪れる場面を間近に観察でき、美しいⅡ型♀も初体験した。大汗をかきながらひと山越えてたどりついた伊豆味の人家近くで捕らえた2頭目のⅡ型♀が乙羽岳林道の個体と後翅白紋にかぶさる赤い鱗粉がいくらか違って興味をわく。1995年11月には初めて訪れた波照間島で、広くはない島内のどこに行ってもシロオビアゲハが群れ飛んでいて、♀が混じっていてもそのほとんどがあまり見栄えのしないⅠ型ばかりの状況にうんざりしたが、ブリブチ公園の近くでようやくⅡ型♀に出会い、その後翅模様が沖縄本部半島産とはまた微妙に異なっていていっそう関心度が高まる。大型アゲハ類は標本箱を占領してしまうので最近ほとんどを羽だけのアルバム形式にしており、その中からシロオビアゲハⅡ型♀の例を示すが、後翅の白紋と赤鱗粉の出方などに変化の多いことが分かる（左：翅表、右：裏面）。



このシロオビアゲハのⅡ型♀は、体内に毒をもつことで鳥などの天敵から身を護っているとされるベニモンアゲハの分布が広がるのと相応して、そのベニモンアゲハに擬態するタイプとして発生頻度が増したという説があるが、果たして短期間にそのような都合のいい変異が起こるのかどうか容易には納得しがたい。この♀におけるⅠ、Ⅱ型の出現度に関してはⅡ型の方が優性であることが交配実験で明らかにされているという。